

所内研修① 「局長講話」「室長講話」

4月7日(火)に第1回所内研修を実施しました。

初めに、知花賢正事務局長を講師に「組合(私たちの職場)のはなし～市町村行政の一部を担う団体として～」と題して、南部広域行政組合の組織と事業内容、市町村負担金と事業経費等を根拠となる法律や資料をもとに、お話ししていただきました。さらに、設立21年目を迎える島尻教育研究所の設立の趣旨や設立への思いも語られました。

続いて、広域行政組合の一般廃棄物処理施設建設準備室の山城匡室長は、「南部のごみ処理の現状について～南部の心は一つ～」と題して、南部のごみ処理の現状と廃棄物処理の歴史とその時代背景、さらに、最終処分場建設合意に至るまでの経緯、南城市に建設される被覆型最終処分場の進捗状況をお話しになりました。



写真1 局長講話



写真2 室長講話

【局長講話の概要】

- ◇南部広域行政組合とは・・・地方自治法 284 条に基づき昭和 56 年に設立された一部事務組合  
(特別地方公共団体)
- ◇組合の組織及び事業について(組合の4つの事業)
  - ①一般廃棄物最終処分場の設置及び管理運営
  - ②ごみ処理広域化計画及び施設整備
  - ③視聴覚ライブラリーの設置及び管理運営
  - ④島尻教育研究所の設置及び管理運営  
(適応指導教室「しのめ教室」)
- ◇島尻教育研究所のあゆみ

【室長講話の概要】

- ◇南部地区のごみ処理の現状(DVD)
- ◇廃棄物処理の歴史
- ◇最終処分場建設合意に至るまでの経緯
- ◇最終処分場建設に向けて



教育研究員の感想 (研修日誌から)

知花局長のご講話から南部広域行政組合のしくみや事業内容等、これまで知らなかったことを学びました。また、島尻教育研究所のあゆみについて、設立当時の教育関係者の熱意によって設立されたことを知り、改めてありがたい環境で研修ができること、その思いを無駄にしないよう研究に励んでいきたいと思いました。

山城室長講話では、過去にニュース等で見たことがあるくらいだった、南部地区のごみの最終処分場問題について、今日初めて知る学びが多くありました。いかに自分が関心を持っていなかったのか反省しました。そして関心がない故に、軽い気持ちでゴミを捨てていたこれまでの自分を改めようと思いました。室長が最後に話されていた「楽しんで仕事をしています」のお言葉に感銘を受けました。ここまで来るには様々なことがあったと思いますが、そういう言葉が出てくる室長のように仕事に向き合っていきたいと思いました。  
(金城さくら)

南部広域行政組合が設立した経緯等をお話ししていただきました。複数の市町村が必要に感じて協力して立ち上げたことがすばらしいと感じました。また、このような行政機関があることを知り勉強になりました。島尻教育研究所の設立に関しても、多くの教育関係者の熱き思いと情熱を感じました。その思いを無駄にすることなく研修に励みたいと思います。

最終処分場建設へ向けての取り組みに感動しました。室長の講話で感じたことは相手への尊重と感謝の大切さです。相手の立場に立って考え、解決策を考える重要性を感じました。私たち教師も仲間や児童の立場に立って考えることでいろいろな問題は解決するのではないかと感じました。問題は起こるのではなく、自分で作り出してしまっているところがあるのかも知れません。

児童の立場になって考え、寄り添うことが見えない何かが見えてくる状況をつくり出す方法かも知れないと感じました。  
(大城厚)

南部広域行政組合という組織について講話頂き、組合の組織運営が明確になりました。県内で唯一の一部事務組合であるという特徴と業務の多様性に触れ、私たちも多くの方々に支えられて生活を送っているのだという理解が深まりました。その業務の一つである島尻教育研究所は、教育関係者の熱い情熱や頑張りのおかげで設置されたそうです。この貴重な研修の場に籍を置くことができ、大変感謝しております。有意義な研修を積み、現場に還元していきたいと思います。

南部地区のごみ処理についての講話では、十数年かけて一進一退を繰り返しながらごみ処理に大変なご苦労を積み重ねてきたことを知ることができました。重要課題に真摯に向き合い、よりクリーンに、より安全に、より幸せになれる解決策を見出すことができたのは大きな業績だと思います。私たちの個人研究も、「無から生み出す」苦しみはありますが、課題解決に向けて真摯に向き合い、子どもたちの笑顔のためによりよい解決策を見出していきたいと考えています。  
(長門照乃)

南部広域行政組合は、生活に密着した課題を共同で取り組んでいることを初めて知りました。消防署や清掃工場も確かに「～組合」という名称がついており、不思議に思っていたので、その疑問が解決できたのは、よかったです。また、島尻教育研究所の沿革を聞いて、広域行政組合で設置しているのはほとんど例がないこと、研修定員は毎年決まっていた年々全体的に減ってきていることなどを聞いて、貴重な研修の機会を頂けたことに改めて感謝しました。

「自分の出したゴミは自分の場所で処理」…その様な話を聞いた後、自分の普段出しているゴミが沖縄市の最終処分場に行っていると聞いて驚きました。また、最終処分場の決定までの紆余曲折を聞き、やっと前進できる喜びがとても伝わってきました。環境教育の日には、講話をして頂きたいと思いました。  
(具志堅智美)

本来、市町村で行うべき仕事を効率化のために複数で運営・管理するという考え方は非常に良いと感じました。また、教育研究所の位置づけとして、島尻地区で研究所を設置していることは、非常に理にかなっていて、研究員の立場からも、自分が今後関わっていくであろう市町村の教育情勢も情報として入ってくるので、各市町村単位で研修を行うより、教員の資質向上によりつながると思うとともに、このような環境で半年間研修できることを再度嬉しく思いました。ただ、局長の話の中にありましたが、しのめ教室のような適応指導教室は、糸満市や豊見城市のように、各市町村にあるほうが生徒のためにもなるし、その生徒の担任等にとっても関わりやすく、連携も密にとれるのではと感じました。

私たちの暮らしと切り離すことのできないゴミについて、深く考える良い機会となりました。最終処分場建設に向けていろいろな方がゴミについて考えている一方で、簡単にものを買って、簡単にものを捨てていた自分に反省しています。3Rを常に考えて生活していかなければと思います。また、学校現場に戻ったときに、生徒と共にゴミについて考える時間をつくってほしいと思います。  
(古屋誠一)